

二〇二四年六月二八日

梅雨雲の山巒を埋めつくしけり  
一服のまこと新茶とうべなひぬ  
片陰を拾ひつ巡る古都の路地

明日香  
うつき  
澄子

二〇二四年六月二七日

万緑に投げ入れしごと峡の駅  
貸杖は青さの残る今年竹

満天  
なつき

二〇二四年六月二六日

四阿に座せば下より蚊遣香  
あめんぼう綺羅の水面に紛れけり  
電車いま夕焼の湾に傾きぬ  
ふるまひの麦茶空つぽ大葉缶

康子  
うつき  
澄子  
なつき

二〇二四年六月二五日

亡き夫の部屋の窓開け夏の月  
滝壺に飛び込み笑ふ島の子ら  
古書店の本棚に射す西日かな  
山狭に一筋ひかる螢の瀬  
瀬の楽が B G M や 蛍舞ふ

うつき  
もとこ  
みきお  
澄子  
こすもす

二〇二四年六月二四日

さくらんぼ最後の一つ譲りあふ  
無人店野菜並べる日焼けの手  
尖塔の町を自在につばくらめ  
托鉢の足袋に滲み入る梅雨の雨

むべ  
康子  
風民  
かえる

二〇二四年六月二三日

御手洗の後ろの影に雪の下  
遍路みち一服せよと合歓の花

ぼんこ  
澄子

二〇二四年六月二二日

吟行子らに囲まれて蟻の列  
柱廊のごと喬木や夏木立  
片影に寄せて昼寝の営業車  
落し文三刀殿の便りかも  
皮剥けば真珠の照りや新玉葱  
風いなす蓮の大葉の裏返り

うつき  
山椒  
かえる  
よし女  
むべ  
ぼんこ

毎日句会みのる選・二〇二四年七月一日